
手紙の男

真辺よっぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙の男

【Nコード】

N25410

【作者名】

真辺よっぴー

【あらすじ】

大切なものを、

失くしたものを、

置き忘れていませんか？

「郵便です」

無愛想な表情をした郵便配達の男性が、今日もやってきた。

僕はいつも通り一通の小さな手紙を受け取った。いつも通り差出人は書いていない。

僕に手紙を渡すと、郵便配達の男性はすぐにバイクにまたがった。

「あの……。いつも差出人がわからない手紙が僕の元に届くんですが、これは一体何なんでしょうか？」

郵便を配達してくれた男性は、首を傾げた。

「えー、私はしがない一人の郵便配達員ですので。差出人様の意図まではわかりかねますが……」

「でも、これ、宛先も書いてないじゃないですか。どうして僕のところの毎日のように届くんですか？」

「私はある人に、この手紙を、この場所に、必ず届けるように言われてるだけですので……」

それだけ言うと、郵便配達の男性はバイクのエンジンをかけ、そ

のまま去っていた。

バイクがまき散らした砂埃と共に、僕はやり場のない溜息をつく
と、家の中へと静かに戻った。

今まで届いた差出人不明の手紙は、気味が悪かったので全てその
まま保管していた。

最近、仕事もうまくいかず、かと言って、愚痴をこぼせる人も近
くにいなかった僕は、

こうしてわけがわからない手紙を毎日のように受け取っていたの
で、だんだんと苛々が募っていた。

「なんなんだよ、一体」

今まで一枚も開けはしなかったけど、その苛々が募っていた僕は、
誰が書いたかもわからぬ手紙をつい開封してしまった。

「こんな毎日、誰が手紙を送ってくるんだよ」

僕は手紙を開け、中身を乱暴に取り出した。

中身は、小さな封筒だった。

しかし、それには宛先も差出人も書かれていた。

「…………え？」

その宛先と差出人を目にした僕は、驚いた。

宛先は会社の先輩。差出人は、僕だったからだ。

「これは一体？」

僕は気になって、他の手紙も開封してみた。

宛先は、様々だった。

自分の母親の名前。

今は外国で仕事している自分の兄の名前。

喧嘩してしまい疎遠になった親友の名前。

昔付き合っていた恋人の名前。

書かれてる名前は、全て、僕の知ってる人ばかりだった。

そして、差出人は全て僕だった。

「どうして……？」

僕は宛先が会社の先輩の封筒を開けてみた。

中には便箋が入っていた。

僕はそれを取り出し、中身を読んでみた。

そこには、先輩に対して仕事での言いたいことや、自分が仕事でやりたいことがつらつらと並べられていた。

先輩に対して、自分が思ったことが、言いたいことが、的確に書かれていた。

僕は他の封筒も開け、便箋を読んでみた。

ある便箋には、母に照れくさくて言えなかった温かい感謝の言葉があふれていた。

ある便箋には、兄を心配する滅多に口にしない言葉が次から次へと飛び出していた。

ある便箋には、親友に意地になって言えなかった謝罪の言葉が不器用なりに並べられていた。

ある便箋には、昔の恋人にどうしても伝えることが出来なかった自分の気持ちがありありと載せられていた。

僕の字で、僕の言葉で、僕の伝えたかった想いや気持ちがたくさん並べられていた。

でも、どの手紙も嘘も偽りもなく、全て、僕がいつか思ったこと、いつか考えたことだった。

僕はその手紙を一枚一枚、夜が更けても、じっくりと読んでいた。

「郵便です」

いつも通り、次の日も手紙が配達されてきた。

「おや。手紙を読まれましたか」

「はい」

「手紙は、その人の想いや気持ちを文字で代弁するものです。たとえ不器用でも、それを伝えることが出来ない手紙というもの、この世には存在しません。」

あなたは、知らず知らずのうちに、自分の伝えたいことをどこかに置き忘れていませんか？」

郵便配達の男性は、いつもの無愛想な表情で淡々と僕に言った。

「私はその伝えたいことをあなたに届けることが仕事だったんです。」

あなたが正直な素直な方で助かりました。

おかげで私も、手紙を届けることを迷わずにすみましたよ。

そして……」

郵便配達の男性は、鞆の中から、一通の手紙を取り出した。

「これが、最後の手紙になります」

僕に手紙を渡すと、郵便配達の男性はすぐにバイクにまたがった。

「あの……。あなたは一体？」

「ただのしがない郵便配達員ですよ。では……」

それだけ言うと、郵便配達の男性はにやりと笑みを溢し、バイクのエンジンをかけ、そのまま去っていた。

バイクが巻き上げた砂埃の中、僕はすぐに受け取った手紙を開けてみた。

中身は、宛先も何も書いてない封筒に真っ白な便箋が入ってるだけだった。

手紙は、その人の想いや気持ちを代弁するもの

どこかに置き忘れていませんか？

郵便配達の男性の言葉が頭の中に蘇った。

僕はもう二度と、伝えたいことをどこかに置き忘れたりはしないだろう。

なんとなく、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2541o/>

手紙の男

2010年10月11日16時46分発行